

海の民の国・オマーンから

～マングローブと環境教育～

国際耕種とオマーンとの関わりは古くからあり、このニュースレターでもさまざまな機会に紹介している。今回はマングローブ生態系保全に関わる環境情報センター設立のための人材育成プロジェクトの一員として、オマーンを訪問した。『中東、湾岸、産油国』という、最近ではドバイのイメージが強く、超高層ビルが立ち並ぶ近代的な街並みを思い浮かべるが、オマーン的首都マスカットは高層ビルもなく、建物の色調も白色を始めとおだやかなものが多く、全体として落ち着いた印象である。

オマーンは他の湾岸産油国と比べて石油産出量も少なく、外国人労働者の比率も低い。これは外国人に頼らず、なるべく自国民を活用しようという「オマーンナイゼーション」の成果でもある。役所が最もオマーンナイゼーションが進んでいるようで、今回のカウンターパート機関である環境省の職員たちも、お茶くみのインド人以外はほとんどオマーン人である。以前隣国UAE で仕事をした時に、ローカルのカウンターパートを見つけるのに苦労したことを思うと、スーパーマーケットのレジにオマーン人女性が座っているのを見たことは一つの衝撃でもあった。タクシードライバーもオマーン人のみで、さらに床屋もオマーン人限定にしようとしたが、これは怖いからやめてくれ(オマーン人の床屋では安心して髪を切ってもらえない)という反対がたくさん出て却下されたという笑い話もある。

さて今回の業務では、持続的なマングローブ生態系保全を進めるために、環境教育を実践・強化することが主な活動の一つとなっている。マングローブ林はさまざまな動物に生息環境を提供し、豊かな生態系を育んでいるので、マングローブ林を守ることがそう

した生態系の保全や生物多様性を守ることにもつながっていく。マングローブを一つの切り口として、広く環境問題を考える、グローバルな視点を持つ次世代の子供たちを育てるような「場」を、現在建設を進めているマングローブ情報センターが提供していくことになる。

中東産油国と聞くと「砂漠の民」を連想するが、オマーンは海洋交易国として長い歴史を持つ「海の民」と言ってもよい。最盛期にはその領土は、現在のパキスタン西部から南はアフリカ・ザンジバル島にまで及び、多様な文化や異なる宗教を包含する広大な海洋帝国であった。古来オマーンはアラブに属しながら、インド洋を介してインド、パキスタンをはじめとしたアジア文化とも融合して、また遠くザンジバルまでを含むアフリカ圏との交流があり、外に向かって開けた国であった。

このように外部との交流を保ってきた歴史的背景のあるオマーンという国に設立されるマングローブ情報センターは、マングローブや環境保全に関するさまざまな情報を収集・発信して外部とつながっていくことも一つの重要な職務となっており、そしてこれはオマーンという国の立ち位置や役割にふさわしいものであると言える。

(2012年3月 湖東)



オマーン環境省の概観



クルム自然保護区のマングローブ林 (左)
ボードウォークを通過してマングローブ林観察 (右)



子供たちのマングローブ植林体験 (左)
環境ゲーム～マングローブ・エコシステム理解 (右)